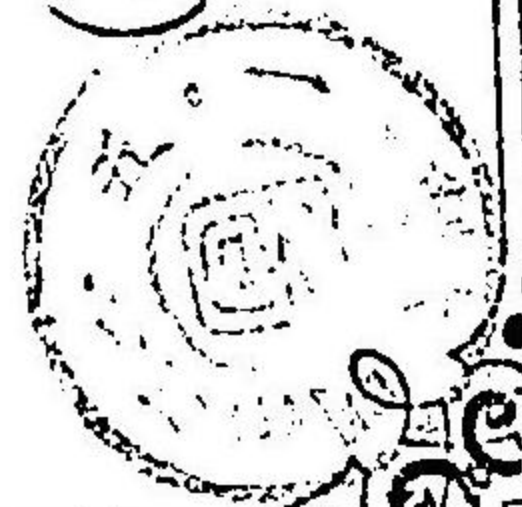


講師 林 堯臣 述

(非賣品)



國語講義

(花月草紙)

完

不許翻刻

大日本中學會

花月草紙 講義

林 麿 臣 講 述

緒 論

學生が普通体の國文、作習はんに、折焚く柴の記に次ぎ、筆力や、歩を進めて、文勢流麗はた氣骨ある境に入り、その妙味を學ぶに、この草紙の筆意も、ツとも、楷梯とするの順序に適す。樂翁の卿は、頗る文章に巧みを極め、當時に在ッて、國文に機軸を出だされし事、尙ほ今日に至るも、以後文筆を以て、此の卿の右に立てる者、をささ世に指を屈するに難しとす。故に初學習文の軌範と爲るに足る。

〔講述の目的〕

この書を講ずるに、予、句法、文則を指摘して、之を教へ導くに力を用ひ、その結構上、簡明なる限りを抜き撰びて、専ら速成を要とせり。是れ唯だ習文標的の一斑を示すが、目的なればなり。

〔本書の題號〕

この草紙名を「花月草紙」と命せしは、この書の序に、

「花によそへ、月になぞらへて、世のため、人のため、ねもあるに教へしめされしを、ちよこ、こどわりを盡し、心に味ふるは、至り深き事ども、多かれば、云云」

と在り。又この草紙開卷の始めに、

「この藻屑の端つかたに、月と花との事なごくしく書いたれば、それをもちて、名立てしは、彼の似非者の爲し事なりとぞ。云云」

と在るに據る。

〔著者の略傳〕

花月草紙の著者、樂翁の卿は、氏は、松平、名は、定信、幕府八代將軍徳川吉宗公の孫にて、田安宗武の七子なり。寶曆八年に生る。出で、白河の城主、松平定邦の嗣と成る。安永四年十一月、從五位下に叙せられ、上總介と稱す。天明三年、封を繼ぎ、越中守と改む。つぎて從四位下に進み、定信少うして學を好み、文筆を以て、名を一世に恣にせしのみならず、博覽多識、頗る經濟の學に富む。嘗て國本論を著して、利生安

民の策を講ず。時に飢饉あり、天下大に困苦、上下慘狀を極む。定信、之を憂へ、封内の租税を免し、力めて節儉し、侍婢一人を止めて、餘は皆暇を取らせき。天明七年、將軍家齊公、職を繼ぎ、奏し請ひて、定信を老中と爲し、侍從に任じて、諸老の上に班せしむ。定信、自ら粗服粗食し、その妻にさへ、衣席に曳く事なからしめき。諸老之を見て、大に愧ぢ、互に質素儉約を競ふに至り、下民また、之にならひ、華奢の弊風、遂に一洗せりき。

始め、將軍吉宗公、天下に令して、嘗て奢侈の陋習を戒めたりしを、年月を経るに隨ひ、禁令漸く弛ぶに至りしかば、定信、更はその舊政に復せん事を謀りしなり。故に當時、その風采を慕はざる者、無かりきとぞ。

天明八年、將軍家齊公、皇宮を、經始し、定信して、之を監督せしめ、工のをはるに及び、節刀と賜はる。

寛政五年、勅使來たりて、典仁親王に、尊號を奉るべき旨を幕府に傳へしめしに、幕府、定信をして、之を拒ましむ。使者と論辨數刻に及び、定信遂に辭屈して、已む。後、慶米二千石を典仁親王に獻るに至りしが、明年親王薨去、推尊の儀遂に罷みき。

同年七月、定信辭職、然れども、幕府樞機に參與せしめき、定信偶々國史を繕き、朝廷の記録をも見て、大に悟る所あり、幕府を蓋したる事多し。會々露國の使長崎に來たり、通商を請ふ、定信、松平容衆と共に沿海を巡視し、豫め之が防備をなして、民心を宥むるを得。定信、文章を以て世に鳴り、歌に巧みなり、又書を能くせり、老中在職中、日夜進勉、治國の方策を講せり、碩儒、柴野栗山、賴春水、尾藤二洲、古賀精里、赤崎海門等皆顧問たり、後、左近衛權少將に任せられしが、文化九年、致仕して、樂翁と稱す。文政十二年、病みて卒しぬ、時に年七十二。

花月草紙序

ひと日一葉の船に乗りて、と在る浦回を漕ぎ巡りしに、渚近き菴屋の烟の細う立ちのぼりたれば、船より上りて、さし覗きたるに、松の柱、竹の網戸の疎かなる窓に挿める物、在り取りて、見れば、いたう薫き染めたる陸奥紙に、高貴き人の手して、筆のまにまに走り書いたまふさま、尋常ならず、花に比へ、月に準へて、世の爲、人の爲、懇に教へ

示されし條々、理を盡し、心に味ふる程、至り深き事ども多かれば、我も、白波の名にや立つらん。と、影護けれど、徐と懐にして、歸らんと爲しに、内より、貴なる翁立ち出でたまひ、手を引きて、座に誘ひ、霞を吸ひ、露を滑みて、汲み交はしつゝ、外面の方を眺めやるに、園には、名も知らぬ草木ども、咲き乱れ、池には、色々の水鳥の、遊べる風情、憂き世の外の心地すれば、こは、仙境にや、入りけん。と、恍惚く餘り、如何なる所にか。と、問ふに、翁笑ひて、此所は、名に負ふ蓬瀛の洲にして、塵に交はる人の、長く止まる所に非ず、はや歸りぬ。と、言ひ捨て、袖を拂ひて、入りたまひぬ。

扱は、夢にや有らん。現にや有らん。と、暫し躊躇ひたるに、寢るども無く覺むるども無く、獨り衾を被ぎて、我家に在り訝しさの儘、此所彼所、見渡したれば、枕頭に書の手紙、在り、高貴き手して、花月草紙と題せり、能く見れば、先に持て歸らんと爲しに、露露人、事無し、嬉しさ限り無く、何がしが、老いず死なすの藥得たりけんも、斯くや。と、急に繰り返しぬる程、傍より、はや明け果て侍りぬ。と、の大聲なるに、驚きて、急き起き出でつゝ、常のごと、装束き立て、日影の塵に交らひぬる状態、仙人の目には、如何にと見らん。

こは、月の柱男の書きたまひきとや。

この書を「蟹の囀り」とは、作者の卑下の詞なるべし。本の筆富士の烟など喚びたる人も有り。と、なんげに不盡の烟は、盡くる事無き心を含めるにや。はた、この卷々の末の章は、殊に心籠めたる物と見れば、本の筆とも、喚びけらし。何れ、いと甚う深き心籠めたる物なれば、同じ高嶺の烟をも、或は雲とも見霞とも見るは、その人がらにも、變はり行く、無盡の草紙とや、謂ふべきと、友垣の隔て無き儘に、記しぬるなり。

又、或る人の書きたまひしなり。

〔言解〕 ひとひ 一日にて、俗に、或る日と、言ふに同じ。

いちえふ 一葉にて、一枚の葉の義、俗に、薄ッぺらのと、言ふ意、小さな舟を形容して言へるなり。

と在るは、と斯うと斯くとや斯うなどのとなり、それを指し定めず、漠然と指す所を形容する副辭、俗に、あるそのと、言ふ意。

浦回 浦の岬と灣との如く屈曲して在る海縁を謂ふ、俗に、浦のめぐりと、言ふに同じ。

渚 波際淺の義、海岸の波打ち際を謂ふ。

塩屋 塩焼く小屋。

松の柱竹の網戸 蟹の住み所の宮屋を形容せしなり。

甚う 極めて甚しき意味を形容する副辭、俗に、きつうと、言ふに同じ。

薫り染めたる 香を炷きて、其の物を薫染せしむるを謂ふ、俗に、いぶし、ふすべ

た、と、言ふに同じ。

陸奥紙 陸奥の産なる檀紙。

高貴き 止む事無きの義、位高く威勢ある人を形容する副辭、俗に、捨て、置か

れぬと、言ふ意。

手して 書にてと、言ふに同じ。書を書く事を、手を書くと、言へり。

筆のまに 筆に任かせて、と、言ふに同じ。

尋常ならず あたりまへで無く、なり。

花に比へ月に準へて、櫻花に譬へ、秋月に擬して、と、言ふ意。

愚に 極めて心厚き意味を形容する副辭。

條々「箇條々々」と言ふ意俗に「そのくだり〜」と言ふが如し。
理を盡し「道理を極めて在りなり」。

ども等の字を訓す「複數」を示す助辭「や何か」と譯す。

白波の名にや立つらん 白波は、盗人の異名。後漢の靈帝の時、張角と謂ふが、白波谷と謂へる地で、盜賊せし故事からの異名なり。名に立つとは、その惡名が世にパツと立つと言ふ。

影誰けれど 後目痛けれど、の義俗に「不安心で、案じられるが」と言ふに同じ。又、「氣になる。氣味のわるい」。

徐と懐にして「こっそりと、懐に入れて」となり。

貴なる「貴やかで在る」の略言。上品に氣高いさまを形容する副辭。

誘ひ「さそふ」と言ふに同じ。

霞を吸ひ露を滑みて 仙鏡の如き幽栖を形容する語。

汲み交はしつゝ 客と二人酒を汲みて、飲み合ふなり。つゝは、な、譯がらとす。

仙境 仙人の居所。

けん 過去の想像を示す結句辭で、あつたで、あらうと譯す。

恍惚く「髣髴るやうに、ぼんやり思はれる意味。俗に「もしも、さうかしら」と言ふに同じ。判然と分からぬ意。

如何なる所にかと「さういふ所で、在らうかしら」となり。

名に負ふ「高名を背に負ひ持つ。義俗に「名高い」と言ふに同じ。

蓬瀛の洲 蓬萊山と瀛洲とを一ツに約めて謂ひしなり。蓬萊山は、想像の神山。

瀛洲も同じ。秦の徐福が「不老不死の薬」を求めに行きし仙境の山を指す。支那上

古の時代、日本國を指して、想像で説を傳へしなり。

塵に交はる人「世の塵に身を穢す通俗の凡人となり。六塵とて、色、聲、香味、觸、法

の六つの欲情を厭ひ離れる事の出來得ない人を謂ふ。

躊躇ひたるに「行き兼ねて二の足を踏んで、まごつく」となり。

衾 夜着を謂ふ。

被ぎて「被つてなり。寢て眠り居るさまを形容して言ふなり。

訝しさの儘に 合點のゆかぬまゝに、となり。

何がしが 秦の徐福

老いず死なすの薬得たりけん も秦の徐福が不老不死の薬を求めんとして、蓬萊瀛洲に行きし故事。

露違ふ事無し。つゆは聊かと言ふ意、俗に爪の垢ほどと言ふに同じ。露は小

くはか無き物ゆゑ、譬へて形容して言ふ。

斯くや「かうで、あらうかど、思ひて」となり。

急に「急いで」と言ふに同じ。

「はや明け果て侍りぬ」との大聲なるに 侍婢などが樂翁の脚を喚び起す聲

の高かりしを言ふ、侍りぬは敬語、おさいます」と譯す、もうはや夜が明けきつて

で、おさいます」となり。

驚きて「目の覺めるを謂ふ、俗に目がさめて」と言ふに同じ

裝束き立て、脚が日勤に登城する官服を着粧ふなり。

日影の塵に交らひぬる状態 朝日の光線に映じて、塵埃の日に觸れるを、取り

も直さず、現在に、世の塵に身を汚し居る事に、形容せしなり。

こは、月の桂男の書きたまひきとや、こは、此の序文はとなり、月の桂男は、支那の想像の説に、月球中に、高さ百丈の桂樹が生ひ茂る。とやうに、其の月球の中に見ゆる模様を指して、然う唱へ初めしなり。高官の身分などに、比へて、言ふ例なり。人の立身するを、月の桂の枝を折るとやうに祝して、稱す。月の桂男とは、この序文を書きし人は、高位高官の人である。と言ふ意。

下賤の者の、口きくさまの舌炎に早言なるを卑しめて、言ふ語。

無盡の草紙 心深く遠くして、意の盡さる事の、無い義に、賛評するなり。

友垣「友我が君の義友を尊敬して、言ふ稱、俗に、友だちの御方と、言ふ意。

又、或る人の書きたまひしなり。 次ぎの序文を書きし人の名を厭ひ憚りて、或

る人とは、言へるなり。

〔文法〕「ひと日、一葉の船に乗りて、より窓に挿める物在り。までを此の序文一篇の冒頭なり。此の草紙を得たる緣由と、其所在とを指し示せり。冒頭とは、一篇の首に置く詞を謂ふ。いはゆる前置きの詞なり。取りて見れば、より筆のまに、走り書いたまふさま、尋常ならず。までを一篇

の提綱とす。此の草紙の品位價值を賛評せり。是れ、此の草紙全編の主意大要を搔い撮みて、提げたるなり。たとへば、網の大綱を提げて、衆目の張るに比す。文章は、記事論説を問はず。總て先づ綱を提ぐるを一定の法とす。

「花に比へ、月に準へて、世のため、人のため、ねもおるに、教へ示されし條々、より、徐と懐にして、歸らんとせしに、までを第一節となし、此の草紙一部の精神、主意の存する所を詳かにして、以て上節の提綱に呼應し、此の序文、一篇の主眼とす。

「丙より貴なる翁立ち出でたまひ、手を引きて座に誘ひ、より、寝るも無く、覺ゆるも無く、獨り衾を被ぎて、我が家に在り、までを第二節とし、此草紙を仙境の神より傳へ得たる來由を示し、以て上節の冒頭に呼應し、夢の首尾を収結す。

「訝しさの儘、此所彼所、見渡したれば、枕頭に書卷の卷々あり、より、日影の塵に交らひぬるありさま、仙びどの目には、如何に見るらん、までを第三節となし、夢に望みし此の草紙を現に得て、心仙境より塵の世にかへりし奇談を述べ、以て上節各條に相照應して、文脈を總束す。

次に「此の書を蟹の囀りとは、より、卑下の詞なるべし、までは、次の序文一篇の冒

頭なり、本の筆、富士の烟など、より、人も在りとなす、までを一篇の提綱とす。

「實に、不盡の烟は、盡くる事無き心を、より、本の筆も、呼びけらし、までを第一節となし、此の草紙の趣意を譽め稱へ、以て一篇の主眼とす。

「何れ、いと甚う深き心こめたる物なれば、より、友垣の隔て無き儘に記しぬるなり、までを第二節となし、尙ほ此の草紙の價值を示し、以て上節各條に照應して、文意を總束す。

〔意解〕ある日、小舟に乗つて、あるその浦のめぐりを漕いで、遊んだ所、波打ち際に鹽竈の烟が見え、たゆえ、舟からあがつて、覗いた所、閑静な筈屋の窓に挿んだ物が、ある。取つて見るに、香で薫きふすべた檀紙に、貴人の手で筆に任せて、なぐり書きに、されたさま、並々の書物で、無い。花に比し、月に擬して、世のため、人のため、深切に教へ示された箇條、々々、一々道理を極め、心に噛みこなして見るのに、感心される事や何か、多い。そこで己も、盗人と言はれやせぬかと、案じられたが、そつと懐に入れて、歸らうと、した所、

窓の内から、品のよい白髪の翁が、立って出て、手を引いて、座敷に通し、酒を出し

て、共に飲み、庭の景色を眺めた所、まだ見たことも無い草や木が、花ざかりで、泉水には、色々の水鳥が、遊んで居る様子、どうも浮世とは、見ぬゆゑ、仙人の住みかに来たのか、どうすく、思はれたから、此所は、どう言ふ所で、在るか、と、問うた所、翁が笑って、此所は、彼の名高い蓬萊山で、ある色氣や、食ひ氣や、錢金に、欲張つて居る、唯だの俗人が、長居する所で、無い、はや、歸れ、と、言ひすて、袖を振り拂つて、窓の内へ、入りて、たしまひなされた。

はてな、夢で、在らうか、現で、在らうかしら、と、しばらく、心を落ちつけて、不思議を打つた所、寐るども無く、覺めるとも無く、獨り夜着を引ッ被つて、己か常の住居で在つた。

不思議で、ならぬから、あちこちと、見まはした所、枕もとにふと書ツキの卷々が、在る。貴人の手で、花月草紙と、表題が、して在る。能く見れば、先きに、持ッて、歸らう、と、した書き物に、ちツとも、違ッて居らぬ。嬉しさ、飛び立つほどで、彼の徐福が、不老不死の薬を、蓬萊山で、得たツた心もちも、斯んな氣もちで、在つたで、有らうか、と、急いで、何遍となく、繰り返し、見るうち、傍らから、大聲で、はや、明けまッて居ります。

に、と、喚び起こす、目が覺めて、はね起きて、出て、平然ツツの通り、出勤する着物を着更へ、世上の交際に、うるたひ、惑ふ俗人の境界を、仙人の目では、どうマア、見るで在らうか。

これは、位の高い身分ある人の、た書きなされた、とか、言ふ

花 月 草 紙

松 平 樂 翁 著

久しう浦回ウラマヅの里に住める翁、在りけり。海、布刈り、鹽焼く暇には、要無エホき藻屑モクツカ、書カい集めて、鹽屋の窓の戸に搔カい挿み置きたるを、世の似非者エセモノの取りて、歸りにけり。翌年マタトシ行きて見れば、懲りすまに搔カい挿み置きたり。

斯く白波のよるゝことに、數も積みしかば、遂に此の卷々と成りぬ。とぞ。此の藻屑モクツカ端つ方に月と花との事、長々しく書いたれば、それをもて、名立てしは、彼の似非者エセモノの爲し事なり。とぞ。蟹サメの嚙サツりところ、謂はまほしけれ。と、里の子は、言ひき。

「無し」と聞けば、「有り」と言はまほしく、「悪しき」と言ふをば、「善き」と事換へて言はん。こそ、いと拗チヂけたる事なれ。櫻てふ花は、我が國の物なるを、唐國カラクニにも、在り。とて、さまゝく例しなぞ、引き附くれど、櫻書サクラガキいたる唐土カラコシの畫も無く、叶へり。と思ふ詩カワウタも無ければ、「無し」とこそ、言ふべけれ。

いでや、櫻と謂はでしも、花とだに、謂へば、異木イキには、紛れぬ者を、はのゝと明け行く

山際ヤマノヘ雲か雪かどばかり、咲き満ちたるも、霞籠カスミカケめたる夕暮れ、花の氣勢キセツも、臆オソクに見えて、此所ココにのみ暮れ残す景色ケシキなど、言ふは淺かりけり、咲いて勢イセの延ヒキやかなれば、近劣チカカりするなど、言ふは、彼の言換コトカへて、才負サイネふ心に言ふ事なりかし。風に散りかふも、雨に濡るヌルも、遠山トウサンに見るも、軒端ケンタに向ふも、明け仄ヒラ夕暮れも、露の晝間ヒルマも、目離メリる、時し無きを、殊トシに我が國風クニカゼの姿にて、枝も、素直スナホに、花の形も、豊トヨけく、匂ニホひさへも、言痛コトイタからぬも、怪オドロクしきまでにてこそ、覺ゆる物なれ、然ると、何所ナニトコロにも在り、と、言ふは、更なり、曙アキラ夕暮れなと、面白オモシロからんやうに、詞添コトゾふるは、未だ深く染めし心には、有らざりけり、總て詞もて言ひ盡コトツクくさん、と思ふは、いと淺オソクき心かな。

〔言解〕 浦回ウラマヅ 海縁ウミノヘの屈曲クツクツせる回りを謂ふ、俗に言ふ、浦のめぐり

翁オキナ 白髮シラカミの極老キョウロウい果てた年寄、轉じて、老人の敬語に言ふ。

海布刈ウミフキり 海布ウミフは、昆布ヒロノ、荒布アラフなど、總て海藻を刈り取る海人の業。

鹽シホ焼く 海水ウミノミヅを汲みて、食鹽シホを製し、焼く海人の業。

要無エツき 「益エキも無い」と、言ふに同じ。

藻屑モクシ 海中ウミノナカの塵芥チニキ實は、樂翁ガクオウが、自筆の草稿を卑下して言ふ、藻屑は、掻き寄せる

物ゆゑ、書き集める義に、あやなせり。

鹽屋シホヤ 鹽籠シホカゴの小屋、鹽シホを焼く小屋なり、樂翁ガクオウ、自らが、書齋ショウサイを謙遜して言ふ。

世ヨの似非ニヒ者モノ 似非ニヒは似て非なる者、俗に、護摩ゴマ化カし者モノと、言ふに同じ、著者の原稿

を掠カスめ乞ヒひて、利カを街マチふ書肆ショウジを卑ヒしめて言ふ。

懲コトりずまに 「不懲コト又マタの略言、俗に、生シヤウも懲コトりも無く」と、言ふに同じ。

極キョクい挿ハサみ置オキきたるを、折マりに觸フれ、事に就ツきての筆のすさびに書き置オキきたる

草稿ソウカウを物モノに挿ハサみ置オキいたを、となり。

白波シロナミ 盗人トウジンの異名、説明上トウジヤウにあり。

よるく、おどに 樂翁ガクオウ、燈トウの下ノに、毎夜ツネニ々々ツツに書き留トドめたるを、書肆ショウジが、寄ヨるく

に言ひ掛けたり。

途ツに 事コトの果ツてを形容する、副辭ソコノ、俗に、どうどう又、終ハはりニに「仕舞シマひの果ツてにな

と、言ふに同じ。

「卷々マキマキと成ナりぬ」とぞ、書肆ショウジが、どうく、仕舞シマひの果ツてに、此ココの花月草紙ハナツクサシと謂イふ

部の書シヤと成ナして、出版シュツパンしたと、噂ウソに聞クくとなりとぞは、風説フウセツの意イを示す結句辭ケツクジ。

うなど、譯す。

此の藻屑の端つ方に「此の花月草紙の開卷に」となり。

名立てしは、「書の題号を附けたのは」となり。

彼の似非者の爲し事なりとぞ。「あの書肆らが爲た事で、あるさうな」となり。

蟹の囀り 物識らぬ下賤の者の言語は、片訛りにて、鄙俚なるが中に海人は、殊

に詞遣ひの鄙俚を極めたる者なれば、鳥の囀るが如く聞こえて、聞き取りの判

明せざるに譬へ言ふ例なり。樂翁、自著の書を謙遜して、言ふ。

里の子 世間の人を指して、言ふ。

言はまほしく、「言ひたぐ」と言ふに同じ。

いでや 相手に對して、反對の意見を示す發語。

花 櫻の異名櫻は花王とも書きて、花の司なればなり。

はのくくと、仄々として、仄かに明け渡る明け暮れの景色を形容する副辭。

夕暮れ 夕真暮れにて、夕暗を謂ふ。

氣勢 「面影又そぶりと、言ふに同じ。

臙 仄暗き影を謂ふ。俗にぼんやりまたぼやけいると、言ふに同じ。

花の帯

散りかふ、散り交はすの約言俗に散り遠ふと、言ふに同じ。

目離るゝ 「目放す」と言ふに同じ、見飽きる意。

言痛からぬも、「深濃く無いのも」となり。

〔文法〕 右、一篇は、櫻花の事を記し、章を三段、三節に分ち

久しう浦回の里に翁在りけり。より世の似非者の取りて歸りにけり。までを第

一段落となし、本書全編に涉りて、此の草紙の成りし來歴の端緒を述べ、以て一

篇の冒頭とす。またの年、行きて見れば、より蟹の囀とこそ、謂はれまほしけれ。と

里の子は、言ひき。までを第二段落となし、本書全編の性質大要を示し、以て一篇

の提綱とす。

無しと聞けば、有り。と言はまほしく、より叶へり。と思ふ詩も無ければ、無し。と

こそ、言ふべけれ。までを、篇体中、第一節となし、唐土には、櫻花の無きを斷言し、以

て反形の筆法に據り、本朝の櫻花を誇稱す。

「いでや、櫻と謂はでしも、花とだに言へば、異木には、紛れぬ者を、より、句ひさへも、言痛からぬも、怪しきとまでにてこそ、覺ゆる者なれ、までを篇体中、第二節となし、櫻花は愛翫するに足るべき價值ある事の數件を評論し、以て一篇の主眼とし、然るを、何所にも、在り」と言ふは、更なり、より、総て詞もて、言ひ盡くさん、と思ふは、いと淺き心かな、までを第三節となし、上章の第一第二の兩節を承けて、呼應し、以て一篇の收結を着く。

〔意解〕 長らく浦のあたりに住んで居る白髮翁が、在った。昆布や荒布や何かを測ったり、鹽を焼いたり、する手透きには、役にも立たない事を筆すさみに、徒書したのが、たまつたゆる、鹽籠の小屋の窓に、ねし挿んで置いたのを、世の書肆の奴が、掠め取って歸った。翌年また、書肆の奴が、来て見た處が、白髮翁生も、懲りも無く、おし挿んで置いた。そこで、書肆の奴は、よい事にして、翁が毎夜々々寝るひま、に書きためたのを、れいの奴が、時々来て持って走ったのが、何時と無く、原稿の數が積もり、つて仕舞ひの果てにどう、此の草紙と成った、さうな。

此の書の開卷に「月と花と」の事が、長たらしく、書いて在ったゆゑ、それを取りも直さず、題号としたのは、矢張り、かの書肆の奴が、した事だ、さうな、全体、名が、立派すぎる、紙の轉りと、言うたが、相應ぢや、と、あたりの人は、言うた。

「無い」と聞く、と、有り、と言ひたく、悪い、と言ふ、と、善い、と、天の邪鬼に、片意地を拗けて張るのは、全体良く無い事では、有るが、しかし、櫻と言ふ花は、我が日本にのみ限つて、世界一品で、在るのに、或る學者は、支那にも、在る、と、てゝいろ、例証や何かを擔ぎ出して、片意地を張つて居るやう、すぢやが、笑ふべきで、ある。うの証據には、櫻の花を畫いた唐畫を見た例しが、無い、また、櫻花の色香に、叶つて居る、と思ふ詩も、全で無い所を見れば、支那には、全く櫻は、無い、と、斷言して、よい。

いや、うれ、こかい、櫻と言ふは無いでも、花とさへ、言へば、櫻の事と、世に承知せらる、ほ、どの全權を有して居るものをや、仄のりと、白む夜明けが、たの山ぎは、雲か、雪か、と、見まがふばかり、目の覺めるほど、白く咲き滿ちたのも、よいが、また、霞の立ちこめた夕暗、花の色香の、仄ぐらい中に、白く見へて、何ともかども、言へぬ景

色をば、此所にのみ、太陽が残りて、まだ日は暮れぬ、など言ふのは、却て花を愛す情の淺いので、ある。また、花房の帯が、長いゆゑ、根本に寄ると、粗が見えて、近寄りかする。など、言ふのは、彼の巧みに利口ぶる心に言ふので、ある。

風で散りちがふのを見ても、雨で濡れたのを見ても、遠山に見わたした景色も、軒端に近く見る句ひも、明けぼのも、夕暮れも、晝間の色香も、見飽きる時の、無の上、殊に我が日本風の姿で、枝ぶりも、素直で花も形も、寛たりして、句ひも、薫りさへも、深濃からず、實に、不思議なほど、十分に愛翫するに足りた花と、思はれるワイ。

であるを、何所にも、櫻は、在る物と、誤解し、強ひ言、言ふが如きは、言ふまでも、無い僻説で、ある。また、曙の景色、夕暮れの色香など、面白げに詞をつくるに添へるのは、未だ櫻花に、心を深く染めた眞の情では、無いので、ある。詞を以て、言ひ盡くさうと、思ふのは、却て櫻を愛する情の淺いからの事であるワイ。

月のさし昇る、頃明け仄の空、覺えて、横雲の棚引きたるに、や、句ひ初められたと、遠山の梢に猶豫うて、姿も見えず、辛うじて、さし昇りけり、梢の憂さも、晴れにけりと思へ

ばいつしか雲の一つ出で來たるが、近寄るほど、あや憎に、月の方より、雲の内へ掻き入るやうに見ゆ。こは如何にせんと、暫し打ち目守るに、雲の端の方、明う見ゆるにぞ、出で離れたらば、はや懸からん隈は、有らじと、思ふに、何時の間にか、また白雲の月待ちが、波に、棚引きて見ゆれば、胸打潰れて、打見るに、初めの雲より出でたる光り、いと新しう見えて、殊に明けし彼の待ち居たる雲に向へば、又馳入るも、いと愁氣し。月の入りて見れば、雲も、流石に言痛からず。此所彼所に、それと、面影見ゆるにぞ、只管に恨み果て、見居たる内に、衣手も、濡り行きて、露も、蟲の音も、盛りなりけり。つくづくと對ひ居たれば、心の果て無きやうにこそ、覺ゆしか。

〔管解〕 明け仄の空、覺えて、仄より白む夜明け方の空を見たやうに、となり。

横雲 朝夜明け方には、横に雲が、棚引く者なり。故に、あけぼの、空おぼえて、とは言ふ。

や、句ひ初められたれば、月の光りが、雲に映して、段々明るく成り初める空の景色を形容して、言ふ。

猶豫うて、月が出さうで、出ない状を形容して、言ふ。猶豫ふは、二の足を踏んで

躊躇するを謂ふ。

姿も見えず。「月の姿も見えない」となり

辛うじて、俗に「やッとの事」と言ふに同じ。「千辛万苦して」と言ふ意味を示す

ための副辞。

目守る「凝然」と見詰める「と言ふに同じ。目を放さず見つめるを謂ふ。

胸打ち潰れて 俗に「打ッ魂消て」と言ふに同じ。張合ひ抜けの爲た意味を形容

して言ふ。

流石がに 俗に「さうでは有るがそれだけに、またまさか」と言ふに同じ。併ら

成る程と言ふ意味を形容する副辞。

只管らに 俗に「是非ともに、またひと向きに」と言ふに同じ。「一心不乱に」と言ふ

意味を形容する副辞。

つくくと 俗に「しみくと、またつくねんと」と言ふに同じ。「一心に思ひ入ッ

た意味を形容する副辞。

〔文法〕右一篇は、月の事を記し、章段節に分ち、

「月のさし昇る頃、明け仄の空覺わて、より猶豫うて、姿も見えず。辛うじて、さし昇りけり。までを第一段落となし、月のさし昇りて出でたる景色を記し、以て一篇の提綱とす。

「梢の憂さも晴れにけり」と思へば、より衣手も濡り行きて、露も蟲の音も盛りこけり。までを第二段落となし、月を愛する情の切なるを盡くし記し、以て一篇の主眼とす。

「つくくと」と對ひ居たれば、より果て無きやうにこそ覺わしか。までを第三段落となし、月を夜深く眺め入りたる情を述べ、以て文意の收結を著く。

〔意解〕月の出る頃、空の景色が、どんと夜明けがたを見たやうに、横雲の棚引いた空に段々、月の影が、ちらちら映じて出かゝつたが、遠山の梢の陰に、ためらつて月の形が、現はれない。するうち、やつとの事で、月が出た。

梢に影の障る憂さも、晴れたと、思へば、何時の間にか、雲が、一つ出て、近寄るや否、月の方から、雲の中へ、駈け込ひやうに見ゆる。こりや、どうしようもない。驚いて、凝然と見詰めて居た所、雲の端の方が、明るく見ゆるゆゑ、此の雲を外れて出た。

らばや掛かる限は在るまいと思つたのに、何時のまにかまた白雲が月を待つて居る風に空に横たはつて見ゆるゆゑ、打つ魂消て、氣を揉んで居るうち、最初の雲から出た光り、新しう見えて、殊に朗かである。彼の待つて居た雲に向かへば、また馳せ入るも、甚だつらい。月が入りてから、見れば、雲も、まことに、さう、しつゞ濃くも、無い。此所彼所に、それと面影が見えるゆゑ、ひと向きに、恨み果て無いで、見て居た所、衣手も、濡り行きて、露も、蟲の音も、盛りで、ある。つくねんど、對ひ居た所、心の深く思入りて、果てしが無く、唯だ、氣が遠く成るやうに、思はれた。月の夜半こそ、思ふ隈も無く、心の底も、澄み渡りぬるものなれ。然れども、暗の夜の空晴れて、星の光り朗かなるに、風高く吹き交ふは、また優りぬるやうに覺ゆる。と言へば、雨ぞいと優りぬるを、と言ふ。

「如何に、と言へば、いでや、早天の雨は、更なり。草木の花咲き實るも、皆雨の恵みにこそ、有んなれ。また、その感情の深さを言は、今日は、元日なりけり。」と言ふに、雨そぼ降りて、霞渡りたるは、實に春かな。とぞ、思ふめる。師走の晦日、長閑やかに降りたるも、春待ち顔にて、いと可笑し。

總て春は、雨こそ、長閑かなれ。軒端より霞わたりに、いと細やかに降れるが、衣潤せども、降るとは、見えす。軒の玉水も、間遠に音して、掬み捨てし。蜘蛛の網に、珠貫く景色、庭の面の、枯生の底に、緑や、添ひ行くも、柳の糸の動きも、やらで、露添ふも、共にいと長閑かなり。燈火挑げても、何となく、光り濡りたるに、鐘の音の、仄かに響き來るも、心澄み渡りぬるものぞかし。その外、梅が香の濡り、夜深く匂ひ渡るも、花に憂しと、啣ちぬるも、哀は、有りけり。春も、老い行く頃、蛙の時得顔に、集くも、可笑し。

郭公の初音、如何に、と思ふ頃、村雨の、はらく、と、降り出でたるも、五月雨の、幾日も、降り暮らして、晝の、悉く、繰り返しつゝ、居たれば、何と無く、世の中の事にも、遠さかりぬる心ちぞ爲る。また、暑さに、堪へ兼ねぬる頃、雲の、漲り出づる勢ありて、風一頻り吹き落ちたるに、柳、逆葉なんぞの、葉裏白く、見せたるも、涼し、頼て、大やかなる雨の間遠に落ちたるが、後には、頻りに、降り來て、物音も聞こえず、土の、匂ひ來たるも、いと心ち良し。軒端は、玉の、簾、掛けたらんやうに、玉水の、絶え間無く、落ちたるに、庭は、一つ、湖水と成りて、或は、瀧落とし、または、水走らせたるに、人々、暫物言はで、打ち目守り居たるも、可笑し。やゝ、雲薄く成れば、池の、面には、計ふるばかり、雨見えて、小鳥など、庭へ踊り出

で、餌拾ふ状なり。始め、雲の立ち出し方は、はや空の、一入、縁に見わた、虹なんど、見ゆるに木々の緑の庭澄に影見ゆるも、いと涼し。老いたる女など、雷の音に驚きて、這ひ出でたるが、今日のは、若かりし時のおど、能く晴れにけり。今時のは、斯く晴るゝ事、稀れなり。なんど、はや繰り言、言ふも、在り、彼は、斯く周章てし、など、言ひて、互に笑ひ響みつゝ、今日は、蚊も、妙かるべし。雷の音も、いと幽かなり。此の頃の暑さも、忘れぬ。とて、端近う出づれば、夕月の光り、射し渡りて、草木の露も、玉なすに、肥を脹れたる蛙の、物待ち顔に、空打ち、眺みて、不束かなる音に、鳴くも、可笑し。

秋來る頃の雨は、昨日に變はりて、何と無う淋し。萩の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも、身に染む心ちど、爲る。常に聞き馴れし、筒の水の音までも、哀深くこそ。月の前の村雨も、また可笑し。まいて、や、夜寒むの頃、鳴き囁らしたる蟲の音の、雨のを止みに幽かなる聲して、枕近く鳴き寄るも、哀。此の雨に木々も、染めなんど、思へば、茸なんど、生ひ出でなん。栗も、はや落つべし。など、童べの物淋しげに、燈火に對ひつゝ、言ひ出づるも、實に種々なり。夜深き鐘の音の打ち、濕るものから、流石に秋は、聲互に、聞こゆるにぞ、待つ夜、別れの思ひまでも、思ひ出で、鐘撞く人の心をも、哀と思ふばかり。

感情は、いと深かりけり。紅葉の染め添ふも、白菊の移り行きて、一盛り見するも、尾花の露重げに打ち萎れたるに、龍膽の恨み深く咲きたる邊も、付きくし。牽牛花の、皆枯れたる中に、小やかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまでも、萎み隠れたる。又、哀なり。野分きの風は、愕々しき物から、雨は、夕立に劣らざれど、流石に哀を添ふるは、秋の習ひなるべし。

時雨の「サ」と音して、夕日に白く降り來るも、また音換へて、枕問ふも、可笑し。月よりも、暗の夜よりも、哀深き物には、侍らすや。と、言へば、斯やうに言ひ變へては、實にも、言ふべからんが、一年も、降る心地して、誦み見れば、此の夜は、一昨日より降り出でしを、と思ふ心は、變らじと、心の内に思ひて、聞き居しも、また可笑しかりけり。

〔言解〕 隈、暗く入り込んだ部分。

吹きかよ、吹き交はすの約言。風が、東からも、西からも、吹き違ふなり。

いでや、既に説けり。

早天、日照りの續いた空。

有るなれ、有るなり、となりなりをなれと言ふのは、起句のこそに對して、照應

する結句の格。

軒の玉水 軒の雨垂り。

蜘蛛の網 蜘蛛の巣蜘蛛の尻より出す絲を謂ふ。

枯生 枯れ草。

唧ち 「託け恨み」と言ふに同じ。

集く 群がり集まる」と言ふに同じ。

村雨 叢々に定め無く降る雨。

五月雨 五月頃に空晴間無く降る霖雨。

雲の張り出づる。雲脚の早き勢ひを形容して水の漲り流れるに比して、言ふ

葉裏白く見せたるも、「葉を風が吹き返したるも」となり。

大やか 「大い風など言ふに同じ。

玉水 「雨垂り」を謂ふ。

打ち目守り 打ちはその勢ひを形容する副辞目守りは目で見詰めるなり。

一入 「一際また一層」と言ふに同じ。

庭潦 雨の降つた爲に庭に溜つた水。行潦とも書く。俗に「雨降りわけくの水溜まり」と言ふに同じ。

互に 「互に」と言ふに同じ。相手と共にと言ふ意味を形容する副辞。

笑ひ嚙み 笑ひとよめくなり。俗に「一同をつと笑ふ」と言ふに同じ。

物待ち顔に 「雨を待ちとはづらになり。

不束かなる 無骨に卑しげなる状を形容する形容詞。俗に「ぶざまな」と言ふに同じ。

籠 高く掛け渡したる樋。

哀深くこそ。哀深くこそ在れ。の略句。こそ。の起端辞に在れと言ふ結尾辞を含

めて省きたる格。

まいて 況てなり況や」と言ふに同じ。

雨の小止みに 「雨の晴れ間」と言ふに同じ。

染めなん。そめよう」となり。

茸など 「茸や何か」と言ふに同じ。松茸だの初茸だのとなり。

童部にて「子供仲間」と言ふに同じ。
實に 誠實なる意味を形容する副辭「實」に「言ふに同じ」
流石に 「併し其れだけ在ッて」と言ふに同じ。乙に對して甲の不足を補ひ助くる意味を形容する副辭。

龍膽 俗に謂ふ「りんどう草花の名」。

付々々し 其の物の此れに似付かはしきを言ふ。

野分の風 暴風とも書く。秋の二百十日。若くは二百二十日などの風雨を指して謂ふ。野を分け行くが如く、吹き荒れる嵐。

愕々しき 「ぞつとする程、凄く恐ろしき」を形容する形容詞。

物から 「物ながら」と言ふに同じ。

時雨 十月頃の晴雨、定め無く、薄寒き風に競ひ降る初冬の雨を謂ふ。

さど音して の「サ」は、雨の降る音を形容せしなり。

侍らすや。 「お座らぬか」と言ふに同じ。侍るは「在る」の敬語

斯うやうに、 俗に「かやうに」と言ふに同じ。

變はらじ。 「變はるまい」と言ふに全く同じ。未來の打消し

〔文法〕 右、一篇は、篇首、篇体、篇尾の三段落、及び八節を以て結構を成せり。

「月の夜半こそ、より、澄み渡りぬる物なれ」までを篇首の第一節として、月夜の效用を述べ、以て一篇の冒頭とす。

「然れど、暗の夜の空晴れて、より、雨ぞ、いと優りぬるぞ」と言ふ、までを篇首の第二節として、暗夜の星明り、また雨天の景色、をもの各論に章意を起し、以て一篇の提綱とす。

「如何に」と問へば、「いでや、旱天の雨は、更なり、より、師走の三十日、長閑かに降りたるも、春待ち顔にて、いと可笑し、」までを篇体中、第一節となし、雨の効用、及び雨天の感情とを概括して記し、以て一篇の提綱とす。

「總て春は、雨こそ、長閑かなれ、より、春も老い行く頃、蛙の時得顔は、集くも、可笑し、」までを篇体中、第二節となし、春雨の愛翫すべき情を各論し、以て上節に對し、逐次、目を詳かにす。

「郭公の初音、如何に」と思ふ頃、より、肥ぬふくれたる蛙の物待ち顔に、空打ち斜眼

みて、不束かなる音に鳴くも可笑し。までを篇体中、第三節となし、五月雨に徒然夕立雨の愕々しき感情を各論し、以て上節に次ぐ。

「秋來る頃の雨は、昨日に變はりて、何と無う淋し。」より、雨は、夕立に劣らざれど、流石に哀をふるは、秋の習ひなるべし。までを第四節となし、秋雨の淋しき感情を各論し、以て上節に次ぐ。

「時雨のサと音して、夕日に白く降り來るも、より、枕問ふも、可笑し。までを第五節となし、時雨の初冬の眺め、また小夜時雨などの寢覺めの情を各論し、以て上節に次ぎ、四季につきて、雨降り的情を述べ悉せり。

「月よりも、暗の夜よりも、哀深き物には、侍らすや。」と言へば、より、思ふ心は、變はらじ。と、心のうちに思ひて、聽き居しも、また可笑しかりけり。までを篇尾の一節として、雨を愛する相手に對して、月を愛する人の情を自問自答し、以て篇首の冒頭及び提綱に照應し、一篇の文意を收結す。

〔意解〕 月のよい晩には、胸も晴れて、心の底まで澄み渡るもので、在る。然うでは、あるが、月の無い夜も、空が晴れて、星の明りが、朗か、風が高く吹きかよふ眺めは、

また別な物で、下手な月夜よりか、優るやうに思はれる。と、一人の友が言へば、また一人が、君は然う言はれるが、實は、雨が、いッち優って居るに、と言ふ。

「どう言ふ譯ぞ」と言うた所、いやそりや、早天の時の雨は、言ふまでも無いこと、草木が、花が咲いたり、實が生つたりするのも、皆此の雨の恵みで、ある。また、その雨の眺めの感情の深い度合ひを言はうなら、今日は、元日だ。と言ふのに、雨が、しよぼ〜降って、霞が、立った空を、見た時は、成る程、春であるかなア。ぞぞ思うで、在らう。または、十二月の大晦日などに、物靜かに、しど〜降ったのも、春を待つ。と言はぬば、かゝり、餘程面白い。

總て春は、雨が、いッち長閑か、である。軒端から、霞が、立ちこめて、降るのが、目には見ぬ無いで、衣類が、濡れ、軒の雫も、間遠に音して、棲み捨てた蜘蛛の巢に、露の玉を、なした景色、庭の、枯草の下に、青みが、一雨々々に、添ひゆくのも、柳の糸の動きも、せで、露ひすび、添はるのも、共に、甚だ長閑か、である。燈籠などに、火を、燈した所、何となく、光りが、ぼんやり、濕りを、ねびた空に、鐘の音が、かすかに、重く響く眺めも、心が、ねちついて、しんとする者で、あるワイ。その外、梅の香が、濕って、夜深く匂ひ

驚るのも、花に恨みを托つける情や何かも、哀は、別段で、在る。春も、末に成りゆく頃はい、蛙が、時得たふうに、沼にも田にも、集まり鳴くのも、また面白い。時鳥の初音は、どうしたか、と、待ちどほな頃、村雨が、ばら／＼と降り出したのも、また五月雨が、幾日も晴、間無く降りつゝいて、書物のあの巻、この巻、繰りかへしつゝ、居た所、何と無く、世事に遠く離れて、山の奥へでも、入った心持ちが、する。また曇さに、凌ぎ兼ねる頃、雲が、墨を流すやうに、空が、暗く成って、風が、どつど吹き起こって、柳や蓮の葉や何か、裏白く吹き返って、見えたのも、涼しい。すうち大粒な雨が、間をばにばつり／＼と、落ちて来たのが、後には、急に降って来て、物音も、聞こえず。土の香が、薫って来たのも、餘程、氣もちの、よいものである。軒端は、どんど玉の簾でも、掛け流したかと思ふやうに、雨垂りが、絶え間なく落ちた上、に、庭は、一体に、湖水と成って、或は瀧を落とし、または水を走らかしたりなをするのに、人々は、暫時物も、言はで、唯だ、網れて、見詰め居たるのも、面白い。段々と雲が、うすく成るにつれ、池の水面に、ほんの、算へられる程、僅かに、雨が見えて、小鳥や何か、庭に躍り出て、餌を拾ふも、見ぬ、最初、雲が、立ち出た方は、はや空が、

一きは、緑に見えて、虹や何か、見えるに、木々の緑が、庭の溜まり水に影が見えるも、至って涼しい。年寄の女などが、雷鳴の音に驚いて、這ひ出でた後、今日のは、若かつた時のやうに、能く晴れたワイ、今時のは、斯く晴れる事が、稀で、ある。なとど、はや雷の恐い事も、打ち忘れて、繰り言と言ふも、在る。また、彼は、あのやうに、周章つた。なとど、言ひやつて、互に笑ひをよめさつ、今日は、蚊も、妙かるべし。雷鳴の音も、もはや幽かで、在る。此の頃の曇さも、忘れた。とて、端近う出た所、夕月の光りが、射し渡りて、草木も露も、玉なすに、肥ぬふとつた蛙が、雨待ちをうげに、空を打ち斜眼み、無骨なだみ聲に、鳴くのも、面白い。秋の初めの頃の雨は、昨日には、變りて、何と無く、淋しい。萩の上風、外山の鹿の音や、何か、月よりも、身に、しむ心ちが、する。常に、聞き馴れた、笈の水の音までも、哀は、深くある。月照る空の、村雨も、また面白い。殊に、段々、夜寒に成る頃、鳴きからした蟲の音が、雨の晴れ間に、幽かな聲で、枕近く、鳴き寄るのも、哀で、ある。此の雨で、木々も、染めるで、あらう。と、思へば、松茸や、初茸なども、生えるで、在らう。粟も、はや落るで、あらう。なとど、子供らが、物淋しげに、燈火に對ひつゝ、言ひ出でるも、實に種

々で、ある。夜深き鐘の音が、打ち濕るもの、それだけ在ッて、秋は、聲が、互に聞
こゆるにぞ、待つ夜、別れの朝などの男女の情までも、思ひ出で、鐘撞く人の心を
も、哀と、思ふばかり、感情は、至ッて、深く在る。紅葉の染りまさるもの、白菊の移り
ゆきて、一盛り見せるのも、尾花の露重そうに、打ち萎れたるに、龍膽の恨み深げ
に咲いた邊も、似つかはしい。
朝顔の、皆枯れた中に、小ッばけに、赤う咲き出でたるが、晝過ぎまでも、萎み隠れ
たのも、また哀である。野分きの風は、物凄く恐しい。その雨は、夕立ちに劣ら無い
が、それだけ在ッて、哀を添へる、のは、秋の習ひであらう。
時雨が、サと、音を立て、夕日に白く降り來るも、また音換へて、枕問ひて夢を驚
かすも、哀である。
月夜よりも、暗夜よりも、雨の眺めは、哀の深きものでは、お坐らぬか。と言へば、斯
う言ふ風、に言ひ並べて見た時は、成る程と、言ひたく成りも、致さうが、一年も降
る心ちがして、日敷を指を屈めて算へて見れば、此の夜は、一昨日より降り出し
たので在るのに。と思ふ心持ちは、誰も、變はるまいと、心中に思ひつゝ、聞き居た

も、また面白く、ある。

「何方に火あり」と聞きても、在り合ふ調度なんど、繩に結び付けて、井の中へ入れつ、水
に入れ難き物は、袋のやうな物へ打ち入れて、傍ら去らず、置きぬ、火の斯く遠きを争
で、然は、爲たまふ」と言へば、焼け行かば、遠きも、近く成りぬべし」と言ふ、風、好ければ、此
方へは、來たらじ」と言へば、風、變はりなば、然は、在らじ」と言ふ、人皆、笑ひぬ。或る日、いと
遠方のなりしが、風、急に吹き出で、瞬間に、焼け擴がり、彼の男の邊も、焼け失せぬ。火
鎮まりて、近き四隣、の者ら、物食はん」と爲ても、器具無し」と、歎けば、彼の男、自慢顔にて、
貸して參らせん」とて、彼の繩を引き、手繰れば、鉄よ櫛よ、など謂ふ物、引き揚げつ。また
袋の内より、器具など、出だしつゝ、常々人に笑はれずは、争で斯かる時、譽まれ、爲つべ
き」と言ひしを、實にも」と言ひし人も、在りし」とぞ。

〔言解〕 調度 手回りの道具。

遠方のなりしが、俗に、ゑんばう火事、で在ッたが、また、とはい方の火であるが
と言ふに同じ。

自慢顔 俗に、仕済まし面」と言ふに同じ。

貸して、参らせん。俗に「貸して、上げよう」と言ふに同じ。「貸さう」の敬語。實にも、俗に「或る程、御尤もで、お坐る」と言ふに同じ。

〔文法〕右、一篇は篇首、篇体、篇尾の三段落、及び四節を以て、結構を成せり。

「何方に火在り」と聞きても、「より、傍ら去らず、置きぬ、まてを篇首の一節として、平素、物に用心深き人の行状を記し、以て一篇の提綱とす。

「火の斯く遠きを、争で然は爲たまふ」と言へば、「より、風、變はりなば、然は在らじ」と言ふ、人皆、笑ひぬ、まてを篇体中、第一節となし、彼の用心家と、反對者と、の問答を記し、以て上節に、反應し、後句の伏筆とす。

「或る日、いと遠方の、なりしが、風、急に吹出で、より、常々、人に笑はれずは、争で斯かる時、譽まれ、爲つべき」と言ひしを、まてを篇体中、第二節となし、彼の用心家が譽まれ、を火事に得たりし一事を述べ、以て上句の提綱に呼應し、一篇の主眼とす。

「實にも」と、「より、人も在りし」とぞ、まてを篇尾の一節となし、遂に用心家の心捉てに左祖せしを述べ、以て一篇の収結とす。

〔意解〕

何方に、火あり」と聞きても、そこそこに、火事がある」と聞いたばかりで、まだ遠いか、近いか、分かりも、しないに、在り合ふ手回りの道具や何か、繩に繋げて、井戸の中へ入れたり、水に入れ難い物は、袋めいた物に、袋ひ込んで、側離れず置いた。四隣の人や、出は入る人が、火事は、あのやふに遠いのに、何んで、マア、然うは、爲りますぞ」と言へば、焼け、擴がって、風でも、烈しく成らうなら、遠いのも、近く成るは、直である」と言ふ、風が、よいから、此方へは、來や、仕まい」と言へば、風が、變つた時は、忽ちで在る」と言ふた、人が皆、笑ひあざけつた。或る日、至つて遠方の火事では、つた所、風が、急に吹き出して、見て居るうちに、焼け、擴がり、彼の男の邊も、遂に焼け失せて、しまつた。火が、鎮つてから、近所の人々、食事しよう」と爲ても、器具が、無いとて、歎いたゆゑ、彼の男、得意がはして、貸して進せよう」とて、彼の繩を手繰り、井戸から引き揚げたれば、鉄だの、櫛だの、何か、引き揚げた、又袋の中から、種々の器具を出だしたつゝ、常々、人に笑はれ無かつたなら、どうして、斯ういう場合に、變なれが、せられようぞい」と言つた處、或る程と、感心した人も、在つたそうなる。

攝波の國に川あり、その川の末に、彼の酒造る所ありて、その川水を汲みて、造るが、天

が下に勝れし酒とは、謂ふなりけり。

川の上には、穢多と謂ひて、獸の皮など、襲る者が、往み居て、川の中へ杭立て、生皮を曝す事、常の事なり、或る年、その事を言ひ出で、この酒は、神にも供へ、佛にも奉る物なるを、皮漬す川水にて、造らんは、如何にぞや、穢多なる者をば、川の末へ移して、給はれど、訟へしかば、遂にその如く成りにけり、その年より、如何に酒造れども、例のごと、あらねば、今は、密かに又その皮漬す水の末汲みてや、造らんと爲らん。

〔言解〕 穢多 餌捕りの義、俗に皮剥きまたかはうと言ふ、即ち新平民。

例のおと、あらねば、是までの如く味ひが、美く無いゆゑに、となり。

〔文法〕 右、一篇は、酒造の奇談を書きし、記事。

攝津の國に川在り、は、冒頭、その川の末により、天が下に勝れし酒とは、謂ふなりけり、までを提綱とす。

川の上には、穢多と謂ひて、より、生皮を曝す事、常の事なり、までを篇体中、第一節となし、穢多の所業を説き、以て文意の根因とす。

或る年、その事を言ひ出で、より、遂にその如く成りにけり、までを同じく第二

節となし、その酒造家の主人が、穢多に對しての訟への事由を述べ、以て一篇の主眼とす。

「その年より如何に酒造れども、より、皮漬す水の末汲みてや、造らんとすらん、」を第三節となし、酒造家の主人が、後悔の狀由を述べ、以て文意の収結とす。

〔意解〕 攝津の國に川が、あつた、その川にも、酒造家があつて、その川水で酒を造るので、天下無双の名酒と評判を得た。

川上に、皮ばうが、住んで居つて、獸類の皮や何か曝すとて、川の中に生の皮を漬す事が、常であつた、そこで、酒造家の亭主、その事を言ひ立て、この酒は、神にも佛にも供へ奉る品で、あるに、その穢れた水を汲んで、造るのは、いかゞはしい事である、どうか穢多をば、川下へ移して、下され度き旨、訴訟に及んだ所、つひに、その通りに成つた。

然るに、その年から、どう酒を造つても、舊のやうに、味ひよく造れなかつたゆゑ、今では、隠れて、わざ／＼、又その皮を漬した川下の水を、ひそかに汲んで來て、酒を造らねば成らぬ、とか、言うた。

仙人の傳へし藥とて、いと耳の聰くなるを持ち傳へたる、在りけり、耳疎き者が、今言ひたまふ事は、何ぞと、二度三度問ひ返せば、人も笑ひて言ひも爲ぬさまなり、聞てぬ儘に、打ち黙し居れば、また笑ふ状は、流石かに見ゆめり、
 餘りの耻しさに、彼の藥を乞ひ受けて、飲みしかば、俄かに耳いと聰く成りしは、嬉しきものから、餘りに餘所の事までも、漏るゝ事無く聞てぬけり、米炊ぐ下男が、此の飯に虫の這ひ入りたるが言は、憤りたまはんの、恐ろしさに、密かに取り捨てけり、いと密かに言ふも、はや聞てゆ、知らぬ状すれど、潔疾あれば、聞けば、いと厭ふ心ありて、箸も採らねば、また彼の男らが、嘸きして、昨夜酒の過ぎたまひつらんと、思ひしが、果して見入れも、したまはぬなり、いざ互に今日は、多く給べはべらん、嬉しや、など、言ふも、聞てぬ、憎さ、限り無きものから、聞きし、とも、將た言ひ難し、況て、隣家の物語には、聞き苦しき事も、多く、此所や彼所の言葉より、鳥の聲、虫の音、遠近漏らさず、聞てゆれば、喧しき言ふばかり無くて、耳は、五月蠅き者はあらじと、疎かりし世を戀ひし、どのものせし、どかや。

〔言解〕 仙人 世を捨て、山などに棲み、神境に通じ、不老不死の術を得た人、山人

とは、異なり、誤解するなかれ。

いと耳の聰く成るを「耳の、いと聰く成るを」とせざれば、句格違へり。

黙し居れば、「黙つて居た所となり」。

流石かに「しかし、それだけ在つて」と言ふに同じ。

見ゆめり「見える様子に見ゆる」となり、ゆめりは「とみゆる」と譯す。

飲みしかば、「飲んだ所が」となり。

嬉しきものから「嬉しいながら」となり。

米炊ぐ下男「飯炊き男」なり。

憤り「じれて腹立つ事の敬語、御機嫌がわるい」と言ふに同じ。

嘸きして「耳語りをして」となり。

昨夜「俗に、よんべ」と言ふに同じ。

果して「俗に、案の如く」と言ふに同じ、豫想通りに結局、事の成り果てる意味を

示す副辭。

いざ互に「サア、いざ互に」となり、いざは、人を誘ひ立てる意を示す發語。

給へばべらん、たべませう、と言ふに同じ。はべらんは敬語

將た、又と言ふに同じ。

況て、俗に言ふまでも無い、と言ふに同じ。ましてなり。

聞き苦しき、聞きにくら、と言ふに同じ。

喧しき、喧しきと言ふに同じ。喧しき度合。

言ふばかり無く、言ふに言はれ無いほど、と言ふに同じ。

有らじ、有るまい、となり。

疎かりし世を、以前耳の遠かつた時節を、となり。

ものせしとかや、然様爲たとか。人が言うた、となり。

〔文法〕右、一篇は、饗なる人が、仙薬を用ひて、耳聴くなりし事を書ける記事。

仙人の傳へし薬とて、より、持ち傳へたる在りけり。までを冒頭とす。

耳疎き者が、今、言ひたまふ事は、何ぞ、と、より、また笑ふ状は、流石が見ゆめり。ま

でを提綱とす。

餘りの耻しさに、彼の薬を乞ひ受けて、飲みしかば、より、餘りに餘所の事までも、

漏るゝ事無く聞こぬけり、までを篇体中、第一節となし、仙薬の奇効を述べ、以て一篇の主眼とす。

米炊ぐ下男が、此飯に虫の這ひ入りたるが、より、此所や、彼所の語より鳥の聲、虫

の音、遠近漏らさず、聞こゆれば、喧しき言ふばかり無く、までを第二節となし、

耳の聰き度合を述べ、以て上節を承く。

耳はど五月蠅き者は、より、疎かりし世を戀し、ものせしとかや、までを第三節

とし、耳の聰き憂さを述べ、仙薬の奇効を恨む情を記し、以て反形を筆法に據り

文意を收結す。

〔意解〕仙薬とて、耳の至つて近くなる薬を持ち傳へた人が、在つた、饗が在つて、今

仰しやつた事は、何ンであります、と、二度三度問ひかへせば、人が笑つて馬鹿に

する様子が見ゆる。聞こえ無いゆゑ、へども、として居るゆゑ、また笑つて嘲弄す

る様子は、しかし、然だけに見ゆるので、餘りに耻かしく思ひ、彼の仙薬を乞ひ受

けて、飲んだ所、忽に耳が、さつう近く成つたゆゑ、嬉しいは、うれしいが、又あまり

に、聞こぬ過ぎて、聞か無くも宜い事まで、聞こえて、困る。

飯炊き男が、この飯に虫が這ひ込んだが、言はうものなら、それこそ腹立て、ヒ
 れられるのが恐なさに、そと取り捨てた。と至って密かに言うたのすら、はや
 聞こゆる。そ知らぬ様には、爲るが、痲症のせいで、聞けば、甚だ氣に成つて膳に向
 つても、箸も採らぬゆゑ、また彼の男も、耳こすりを、して、よんべ、酒が、過ぎな
 された。と思つたが、案の如く、今晚は食事を、見むきも、なさら無い。サア、皆が、
 れ互に今日は、ふんだんに飲み食ひしよう。嬉しや、など言ふものさへも聞こぬ
 た惜さは、實に堪へきれぬ。聞ひた。ともまた言ひも、されず、まして、隣家の話し
 こそ、手に取るやうに耳に觸れるには、聞きにくい事が、多い。

此所や彼所の噂話しやら、鳥の聲や、虫の音や、何か遠い近いの嫌ひなく、漏らさ
 ず聞こえるゆゑ、喧しさを、なか、言ひつくされ無いほど、ある。

耳はと五月蠅い者は、またと在るまい。と、耳の遠かつた以前の時が、戀しく思は
 れ、彼の仙薬を用ひたのを後悔したそうな。

大名と謂ふ人たち、集ひ、物語りしたまひける時、一人の君の、言ひたまふ、手能く書く
 人、在らば、一二百石の地、與へたまふか、弓馬の道、稀なる計り、得てし人あらば、千石計

の地、與へたまふか、才も、秀で、文の道より、武士の道、皆至れる。と、言はく、一萬石の地を
 與へたまはんか。と、言へば、昔は、然なん言ふ事も、有りけらし。今は、何所にて、も、然すべ
 し。とは、覺ゆず。と、答へたまふ。然らば、此の閑居のうちの君たち、文の道人に勝れたま
 ふも、在りや、武士の道も、有りや。と、思へど、人並には、嗜みたまへど、秀でし事は、聞き侍
 らず。如何有らん。と、言へば、如何にも、秀でしな。言ふ事は、一節も無し。と、答へたまふ。
 初めの物に勝れし物とても、一二百石の地、だに與へかねたるが、我が輩の、あるは、十
 萬石、二十萬石の地を賜ふは、如何なる事と思ひたまふか。嘗に御祖先の功と、大君の
 寛けく、大いなる御惠なり。然るに、生れしより、斯く尊き者とのみ思ひて、なほいや、増
 しに、位官も、人に超ぬん。とし、大路歩く行装も、我が格よりも、高く、我が家の定めより
 も、雅かに。と、市の童の譽めなん事を欲するのみにて、内に願ふ心の、無きは、いと、うた
 てし。と、言ひたまひし。とかや。

〔言解〕 大名 鎌倉時代からの人の稱、頼朝が朝廷に奏して、諸國に守護職、地頭
 を置きしが、その所領の地、大なる者を大名と稱し、その小なる者を小名と稱す。
 徳川幕府の頃、知行、一萬石以上を大名と謂ひしなり。

弓馬の道稀なるばかり得てし人、弓を射、馬に乗る武術を以て世に一人か二人か、と指を屈せられるくらゐに、妙を得た人となり。

才智なり。才は學藝を實地に活用せし上の働を指して謂ふ。俗にはたらきの、有る無し、と言へり。

武士 物部の轉、物々しき増荒猛夫の群れの義俗に言ふ、いくさ人。

然なん言ふ事も、さやうに、マア言ふことも、となり。有りけらし。「あるさうな」となり。

然すべし。とは覺ぬす。「さう、しよう。とは思はれない」となり。

團居 「團か居の義俗にくるま坐」と言ふに同じ。聞きはべらす。「聞きませぬ」となり。初めの物に勝れし者ども、「最初に一人の君の話しをせられた手を能く書く、能書名筆の人でさへも」となり。

大君 幕府初代將軍、徳川家康公を謂ふ。行装 「外出のいでたち」と言ふに同じ。

我が格よりも、我が家の格式よりも、となり。

我が家の定めよりも、我が家の家法よりも、となり。

内に顧る心 唯だ外装の虚勢を張るのみを、事とせず。内部實力の弓馬術藝の嗜みは言ふまでも無く、萬一の兵備軍器の用意如何に顧る心得となり。

いと「甚だ」と言ふに同じ、「さう」と譯す。うたてし「以ての外」と言ふ意味。俗に不都合きはまつたことよ、と言ふに同じ。

文法 右一篇は、大名諸侯が遊惰に耽ける流弊を誠むる論説体。大名といふ人たち、集ひ物語りしたまひける時より、昔は、然なん言ふ事も、在りけらし。今は、何所にて、然すべし。とは覺ぬす。と答へたまふ。までを論礎とし、綱を提げたるなり。

然らば、此の集會のうち、の君たち、文の道、人に勝れたまふも、在りや、より、いかに、も、秀でしなど、言ふ事は、一ふしも、無し。と答へたまふ。までを第一節となし、當時、大名諸侯が、無學無能にして、大祿を貪り居る實況を記述し、以て前章の提綱に、反應す。

「初めの物に勝れし者とても、一二百石の地だに、興へかねたるが、より、實に祖先の功と、大君の寛けく大いなる御恵みなり、」までを第二節となし、論礎に對する意見を述べ、以て一篇の主眼とす。

「然るに、生れしより、斯く尊き者とのみ思ひて、より、うちに願ふ心の、無きは、いと、うたてし、」と言ひたまひし。とかや、」までを第三節となし、其の安逸遊惰を誡める一篇の精神を以て文意を収結す。

〔意解〕 大名として、歴々の貴族の衆が、ねはせい寄合ッて、話しをなされた時、一人のれ方が言ひなざるのを聴くに、手を能く書く人が、在らうなら、百石や二百石の領地を呉れなざるか、また弓射る術、馬乗る武藝が、世に稀である程、名人なら、千石ほどの領地を呉れなざるか、また才智も、秀で、文學の道から、武術の道も、みな達して居る、と言はうなら、一万石の領地を呉れなさるうか、どうで、お坐る、と言うた所、昔は、然う言ふ事も、在ッたそうな、今時は、どこでも、然やうにしよう、とは思はれない、と、答へなされた。

「然うなら、此の寄合ひのうち、のれ方、文學の道に勝れなされた、れ方も、お坐るか、

武術の道も、人並だけには、嗜みなされたで、お坐らうが、別段一藝に秀でた、れ名をば一向聞き申さない。如何ぞ坐いますやう、と言うた所、いかにも、然うで、お坐る。一能に秀でたり何か、した程の事は、一つも、無い、と、答へなされた。最初れ話まうした彼の手を能く書きて、天下の名筆と稱される程でも、やうやく百石か、二百石の知行ですら、容易に呉れかねたのに、おらが、仲間では、或は十萬石、二十萬石の大枚な高を呉れるのは、どう言ふ事で、在るか、と思ひなざるか。唯だ御祖先の軍功と、將軍家の寛大な御恵みで、ある。それで、在るに、生れた時から、斯やうに唯だ尊い家柄の者とばかり、思ッて、尙はその上にも、位つかさとも、人に超ゆるやうとして、大遠を歩く出で立ちも、身分の格よりも、高く、自身の家の資格よりも、立派に、しよう、と、市中の女子供らが、譽められたるく事は、かり、欲するのみで、肝腎の弓馬の道や、文筆の才能が、下等な者にも、劣る耻をも願ふ方角なく、また、いざ鎌倉と言ふ時の心掛けも無いのは、甚だ以ての外、心得ちがひで、在る、と言ひなされた。とか、噂に聞いた。

「禪意を得たり、と言ふ者、在り、如何にして、得たまひし、」と、問へば、我が此の身は、天地の

者にて、吾と謂ふ者は、無し。吾無ければ、敵も無し。之を彼の浩然の氣とも、謂ひ置きたまひしなり。と、高く心得て、言ひてけり。如何にして、その所を得たまひしか。と、言へば、思ひくして、遂に得しなり。と、言ふ。聞きたる人、いと笑ひて、さまじく、聖も、説き置かれければ、斯かる所得てし人は、今の世に在るべし。とも、思はえぬ計り、稀なるを、未だ其の事々も、知りたまはで、いかで、得たまふべき。と、言へば、腹立ちて、知らざらん人は、如何に言ふとも、吾こそ、得しものを、なきて、君は、然言ふ。吾が得ざる事を知りたまは、言ひ述べたまへ。と、聲振るはして、言ふにぞ、うれ見たまへ。怒りをも、未だ捨て得ずして、此の身を捨てし。と、宣ふか。殊に色と酒とに耽けりたまふ。と、聞きぬ。うれだに勝ちたまはで、吾が身に勝ちたまはんとや。よし、勝ち得しとて、も、忘るてふ事は、いと難き事なめりかし。得し。と、思ふ者、いかで、得ん。君は、武士なれば、弓射る事も、言はん。能く引きて、能く放つが外に、弓の道は、無し。斯くすれば、能く中る。能く中るを知りても、然は、出来ぬは如何にぞや。勝ち負け、争ふ時、人多く中てぬる折りなどは、唯だうれに勝たまはしく思ふぞかし。また早く放つ弓の病も、有り。放し得がたき病も、有り。何れも、心の外なる者ぞかし。また弦の弛みて、吾が耳を打てば、いと、懲りに懲りて、又や

耳打たんと、思ふぞかし。耳を棄つる事も、得せず。遅く放ち、早く放つ事だに、心に任せず。人に敗くるの口惜しさをも、未だ棄て得ずして、いかで、此の身を忘れたまはん。と、かく、今は身に行ふ事は、積らで、口のみ高くなり行きぬ。或る止ん事無き人在りければ、劔の道を得てし。とて、自ら世に並び無。どのみ、常に言ひたまひてけり。或る日、書屋に居たまふ時、末の間の障子を開き、跳り出でたるを見れば、大なる男の赤裸に成りて、君を目掛けて、飛び掛かるを、いで心得たり。とて、刀抜きて、切らんとすれば、跳り超ぬ。或るは伏し、左へ避け、右へ走り、なきて、いかにも、討ち得ず。とやかく爲るうち、すらすらと、走り寄りて、その刀を取りてければ、口惜しさ、限り無く、如何にせん。と、急りたまへば、彼の男、疊に平伏してけり。能く見たまへば、外衛の臣下之。その者の、言ふ。君は、劔の道、能くは、心得たまへども、未だ脱けし位にも、渡りたまはず。然る故に自ら負うて、得てし。どのみ、思ひたまふ。真に得し者は、誰か、良き。と、思ふべき。然る御心にて、坐しまさば、如何なる過ちか。爲たまはん。臣は、劔の道、さして習ひしには、有らぬ。死を極めて爲れば、臣をだに、打ちたまふ事も、成り難かりしぞかし。之を能くく、思ひたまは、御身の過ちも、有らじ。と、涙零して、言ひしかば、君も、殊に感じたまひて、我が無

下に拙かりし事を悟りたまひし。とぞ、能く是らの事を聞きたまひて、悟りとやらん
の道は、止めたまへ。と言ひし。とかや。

〔言解〕 禪意 禪家の坐して、禪を悟る。即ちその宗旨禪學の奥意、禪とは梵語の禪

波羅密の畧なり、譯して、定まること、の義。

浩然の氣 廣大無我の氣、ゆつたりとして、物に拘はらず、廣く大いなる氣位を

謂ふ。

高く心得て、此の上無く、悟りの深い事に心得て、となり。

如何にして、その所を得たまひしかと、どうして、マアその悟りの奥義を得な

されたので、あらうか、となり。

思ひく、て遂に得しなり。 禪學の修行が、つんで、心を凝らしく、て、やつと、得

たので、あるとなり。

いと笑ひて、さつう笑うて、となり。

さまざま、聖も、説き置かれけれど、いろく、と、達磨さまも、説法して、ね置きな

されたが、となり。

斯かる所得てし人は、斯やうな深い悟りの奥を、極め得た人は、となり。

思はえぬ計り稀なるを、思はれないほど稀で、あるのに、マア、となり。

未だ其の事々も、知りたまはで、いかで得たまふべき。まだ、その道の學問すら、

お存じが、無くて、どうして、得なされようぞ、となり。

いかに言ふとも、どう言はうとも、となり。

なきて、君は、然言ふ。何しに、貴所は、然言ふぞ、となり。

吾が得ざる事を知りたまは、言ひ述べたまへ。己が、悟りを得て居無い、と言

ふ事を、そんなに知ッて居られるなら、その譯を言ッて見なされ、となり。

なめり、成るめりの略。俗に、成ると見ゆる、と言ふに同じ。めりは、様子と譯す。

現在の想像辭。

かし、相手に對して事を指し示し意味を形容する助辭。

得し、と思ふ者、いかで、得ん。悟りを得た、と思ふ程の凡夫が、どうして、得られよ、

うかい、となり。

やんと、無き人、身分の高いね人、と謂ふ義。

書屋に居たまふ時、平時書見する一室に居なされた時となり。
 末の間「次ぎの間」と謂ふに同じ。
 赤裯に成りて、「まッ裯に成ッて」となり。
 すらくと、走り寄りて、「苦も無く走り寄ッて」となり。

口惜しさ「残念さ」と言ふに同じ。

自ら負うて 自負して、にて「慢心して」と言ふに同じ。

誰か能きと思ふべき。「何人が自分で出来る」と自慢しようかぬ」となり。

無下に「これより下は無い」と言ふ意味にて、俗に「一向に」と言ふに同じ。

とかや 傳聞する事の疑はしき意味を言ひ顯はす結句辭。

〔文法〕 右、一篇は、禪學の事に就きて、慢心を人に訓誡する論說。

「禪意を得たり」と言ふ者あり、より之を彼の浩然の氣とも、言ひ置きたまひしなり。と高く心得て、言ひてけり。までを提綱とす。道に就ての不覺を例証せしなり。如何にして、その所を得たまひしかと、言へば、よりよじ勝ち得しども、忘るてふ事は、いと難き事なめりかし。得しと、思ふ者、いかで得ん。までを第一節となし。

禪學の悟り難き事を辨じ、以て一篇の論礎とす。

「君は、武士なれば、弓射る事も、言はん、能く引きて、能く放つが外に、弓の道は、無し。より」とにかく、今は、身に行ふ事は、積らで、口のみ高く成り行きぬ。までを第二節となし、一轉、譬へを引きて、論旨を固む。

「或る止ん事なき人、有りけり。劍の道を得てしとて、より、臣は、劍の道、さして習ひしには、あらねど、死を極はめて、爲れば、臣をだに打ちたまふ事も、成り難かりしぞかし。までを第三節となし、再轉、尙ほ事實の確例を徴して、訓誡し、以て一篇の主眼とす。

「之を能くく、思ひたまは、御身の過ちも、有らじ」と、涙こぼして、言ひしかば、より、能く是らの事を聞きたまひて、悟りどやらん。の道は、止めたまへ」と、言ひしかや。までを第四節となし、上節を承けて、彼の貴紳が、臣下の忠告に感服し、一例を証して、慢心を辱かしめ、以て一文の収束とす。

〔意解〕 坐禪の悟りを得た」と、言ふ者が、在るをうして、それは、得なされたか」と、問ふた所、その人が、言ふに、己が此の身体は、天地の物で、吾と言ふ物は、全体無い等の

事である。そこで、吾と言ふ身が無いとした以上は、敵と言ふ者も在らう筈が無い。之を彼の「浩然の氣」とも、言うて置かれたのである。と、此の上も無い。何らに心得て誇りて言うた。又、問うて、どうして、その坐禪の奥義を悟り得なされたか。と言うた所、坐禪の行が積み、心を凝らし、て、やつと得たのである。と言ふ。聞いた人呆れて、吹きだして、言ふに、達磨様も、いろ／＼説き置かれたが、斯やに禪學の悟り得た人は、今の世に在らう筈とも、思はれ無いは、稀である。に、まだ其の道の何たる事をも、知りなさら無いで、どうして、悟りを知り得なさらう筈が有らうか。と、言うた所、彼の人、腹立ちて、坐禪と言ふ事、知ら無い人は、言はう言はうとも、己こそ、悟り得たに違ひ無いものを、何しに、又、貴所は、然う言はれるぞ。若し吾が、禪意を悟り得無い。と言ふ事を知つて居られるなら、其の譯を命此所で、言ひ述べて見なさい。と、聲あらしげ身を震はして、言ふにぞ、嘲笑つて、それ見なされ、怒りをも、未だ捨て得無いで、此の身を捨てた。と、仰しやるか、殊に、魚と酒とにさへ、耽けりなざる。と、聞いた。それにさへ、勝ちなざる事か出来無いで、吾が身に勝ちなさらうぞか。たとひ、勝ち得たとしても、世を捨て、吾を忘れる。と、

言ふ事は、至つて難い事で、有るであらうぞえ、悟りを得た。と、思ふ者、どうして、得よう筈が、在らうか。貴所は、武士で、在るゆゑ、弓射る事を以て、言はう、弓は、抑も能く引いて、能く放つが、外に、弓の道は、無い。斯う爲れば、能く中ると、言ふ譯は、知つて居ても、然う手輕くは、中々出来得無いのは、どうしたものか、あるぞや、勝負を争ふ時、人の多く中てた折りや、何かに、唯だ其に勝ちたく思ふぞや、又、疾く放つ弓の病も、有り、放し得難い弓の癖も、有る。これも、意外な物で、決して心の如く自由には、成らぬ物である。

又、弦が緩んで、吾耳を打つゆゑ、よく／＼懲り果て、またぞろ、耳を打たれや、せぬか。と思ふぞや、耳を捨てる事も、爲得無いで、遅く放ち、早く放つ事、さへ、心に任せ無い。一人に敗ける事の、残念さをも、まだ捨て得無いで、どうして、此の身を忘れる事が、出来得ませうぞえ。とにかく、今の世は、身に行ふ事は、修行が積ま無いで、唯だ口ばかり、高慢に成り行いた。

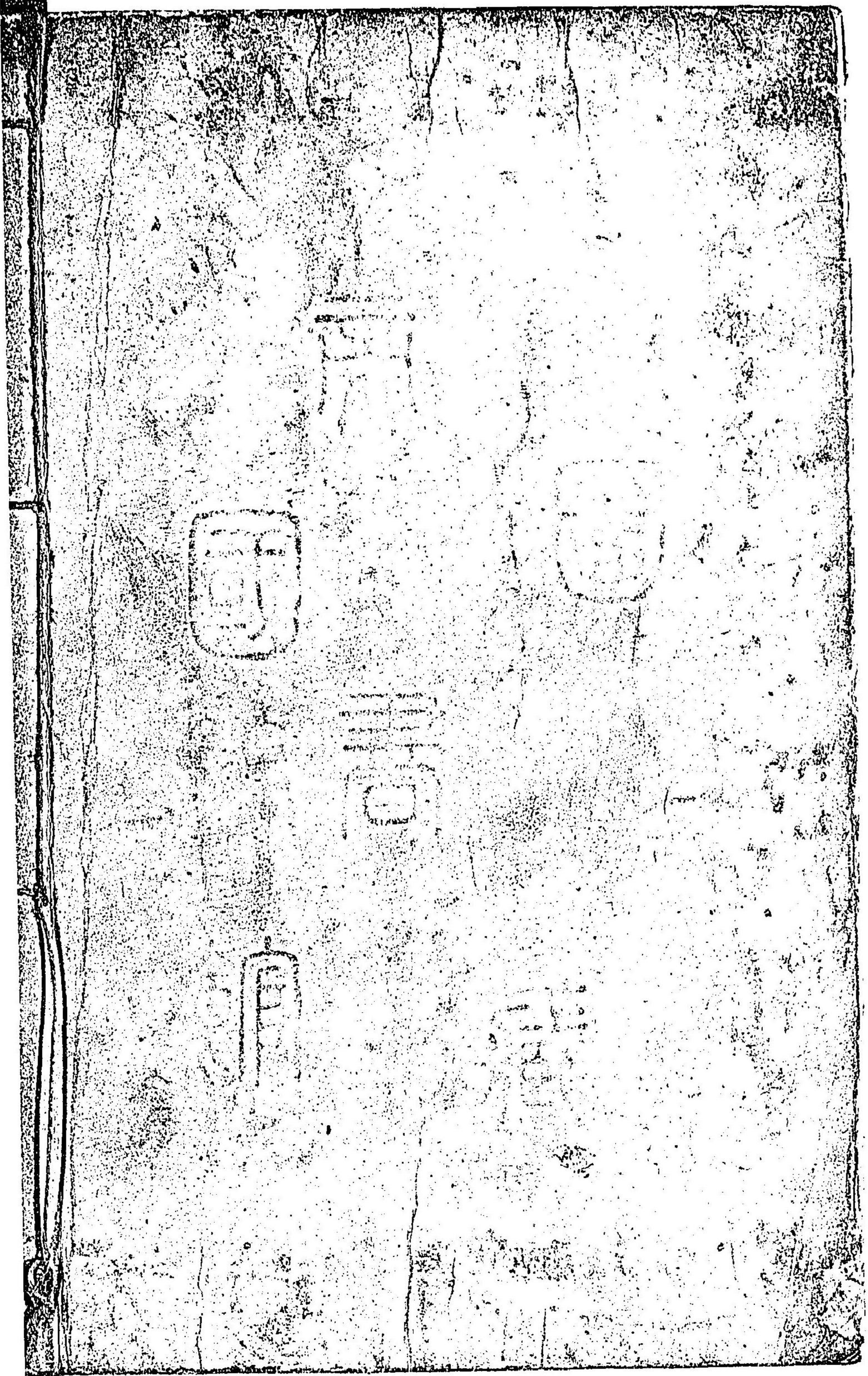
或る貴紳の人が在つた、劍術を學んで、奥義を極めた。とて、自分と誇つて、世に相手と爲る程の者が無い。とばかり、常に言ひ誇られた。

或る日、書齋に居て、書見して、お坐る時、不圖次の間の障子を開けて、跳り出でたるを見れば、大きな男が、赤裸ヌカカに成つて、某貴紳ケイジンを目掛けて、飛び掛かるのを、いで心得たりとて、太刀を抜いて、切らうとするに、跳り超トぬ、或は臥し、左へ避け、右へ走りなせして、どうしても、討ち得無いとや斯う爲るうち、苦も無く走り寄つて、その太刀をもぎ取つた所、残念さ限り無く、どうしようも、急アりなかつた所、彼の男、疊タテに頭を摺りつけて、平伏した。能く、お覽ミうした所、屋敷の外ソトまでもりの家來で、ある。その者が、言ふ。殿様には、劍術を能くは、れ心得なされたでは、あるが、まだ脱トけなされた位にも、渡りなさら無い。然る故に御自慢なされて、悟り得た。とばかり思し召さる。本道ホンミチに得た人は、誰が、自分から能く得た。と思ふもので、坐マらうかぬ。然やうな御心にて、お坐マられなば、どう言ふ。れ過失アヤマを爲されやうかも、知れぬ。私は、劍術を別段習つた事は、ご坐マりませぬが、死を極めて、仕つた事故、私をさへ、れ討ちなされる事も、成り難くお坐マらつしやつたぞや。此の道理を、吳々も、思し召したなら、殿様の御身の、れ過失も、お坐マるまいぞや。と、涙を垂らしながら、忠告を申した所、殿も、殊に感カじなされて、吾が一向イウカウに拙ツかつた事を、いよく、悟

りなされた。とぞ、能く是や何かの事を、れ聞きなされて、禪學の悟りとやら、の道は、れ止めなされまし。と言うたぞか。やら、聞クく。

さて、予が、折マ焚ヒく柴の記に講コウじ續ツきたる花月草紙も、筆意妙味の句法一斑を指摘せり。因て爰に結了を告げ、次回よりは、更に歩を玉タマかつまに進め、以て講教の面目をまますく、新たにせんとす。

62
364



62

364

大日本中學會三十三年後
中二學級講義錄

國語(花月草紙)

林 麿臣

204657-000-4

62-364

國語講義花月草紙

林 麿臣/述

〔刊年不明〕

EDT-0030

